

しなやかな教育

北 川 喜美子

保育者の資質として重要なのは、子どもに穏やか、かつ柔軟に対応していける「しなやかさ」である。音楽を介した保育に於いても、子どもの人間性を豊かに育めるしなやかさが求められる。歌を通じた子どもへの語りかけ、日頃の声、子どもとの息づかいなどは、豊かなコミュニケーションの大事な要素である。それぞれがオーケストラのように調和して、素晴らしい保育を生み出す。仏教保育の曲も、このようなしなやかさを培う良い教材と言える。

キーワード：音楽教育，子ども，コミュニケーション，保育者，仏教保育

はじめに

最近、心や命の教育が叫ばれ、「幼児期からの心の教育」の見直しが幼稚園や保育園の現場や、地域と家庭との関係に於いても、常に問題にされている。子どもたちがおとな社会や仲間から愛されていない事を示す不幸な事件や、殺伐とした世の中の空気が背景にあるように考えられる。

例えて言うなら、幼児教育は根である。そして、子どもの成長に伴い、その教育は、幹・枝や葉に繋がると考えると、幼児期は根を太く育て、張り巡らされた細かい根から養分を十分に吸収し、その養分を幹がりっぱに育つようによい環境と共に送り続けなければいけない。その根っこの部分で大いに関わりを持ち、重要な位置に存在する保育者、ここでは、保育者の資質を通して、音楽と保育者という視点から、「しなやかさ」という言葉をキーワードにして考えた。

しなやか＝穏やかで品の良いようすや、柔軟で弾力性に富むさま（広辞苑 第4版）

1. 保育者としてのしなやかさ

生まれる時には、元気であればと、ただ願っている親も、子どもの成長を目の前にして、つい欲を出し、「早いうちから英語」「スポーツ選手にしたい」「荒川選手のようにスケート」といろんな望みを託してしまいがちであるが、どの保育者や教育に携わる人が、口をそろえて言う言葉は、「小さいうちは遊びが大切よ」であろう。もちろん子どもが普段からしっかり遊んで、その遊びの中から生きる喜び、友達をつくる力や、人と遊べる智恵等が備わり、あそびが心身のエネルギー源の基盤となっている時、はじめて早期教育が生きてくるだろう。しかしながら少子化とともに、親子をとり巻く環境は大きく変わった。同年代の遊び友達をみつけることもむつかしい中で、将来、子も親も受験にしばられたくない、幼稚園から大学へと一貫教育の中でのびのびと育ってほしいと願うのは、当然なのかもしれない。一方、幼稚園では少子化の影響をもろに受け、活気をとりもどそうと、保護者のニーズに応えるべく、「しつけ

重視」「英語・音楽早期教育」「時間外のあずかり保育充実」「未就園児の子育て支援充実」と、今まさに大変である。京都では今春開校された同志社・立命館両小学校への「お受験」に伴ない、昨年の秋より幼児のための受験塾が京都市内に続々と生まれた。又、受験用ファッションをめぐって、「お受験商戦」が熱く戦われ、平均何万円もするお受験ファッションが好調で、売れ行きは上々だという記事が新聞等に載り、又、小学校では考えられない入学金や授業料の額に誰もがびっくりした。現在でも、やはり親が子に望んでいることは、まず受験学力とそれによって得られるであろう将来の経済的豊かさと、安心感であるということに変わりはないようである。

自然の中で、きれいな花を摘み、バッタやコオロギを捕えたりすることで、自然と交わり、自然を生かした体験的な生活を通して、子どもたちの優しさや、思いやりの心が本当に育つのであろうか？ そこには必ず保育者や保護者の温かみのあることばや充実した指導と援助が必要である。又、そこで発せられる声は、小さくなく、ゆっくりとした口調とさわやかさが必要であろう。お受験のため受験塾に通う子どもの負担は計り知れない。保育者の子どもを気づかう言葉や励ましの言葉と同時に「笑顔」とさわやかな声が、救いであり、いやしであろう。

保育者の中には、「幼児を相手にしているので声も大きくなり、しゃがれ声は職業病です」と、誇らしげにおっしゃる方がよくあるが、本当に大きい声を出さないと、幼児とのやりとりができないのであろうか？ 落ちついて子どもを観察し、変化等をしっかり見きわめて幼児に関わる時、その語り口はしっとりとしている。つまり、穏やかで柔軟、「しなやか」そのものである。その場面では決して、大きな声や早口

でまくしたてる必要はないのである。次に、話しながら自分の表情や気持ちの移りかわりに気をつけなくてはならない。けっして無表情や怖い顔つきは、さげなければならない。保育者として子どもをみつめる表情にも「しなやかさ」が必要である。つまり、見る、聞く、におぐ、話す、ふれる等すべての場面に於いて、保育者の子どもや子どもをとり巻く困りの事柄への「気配り」「心配り」に、この「しなやかさ」が必要である。

2. 音楽教育の中のしなやかさ

ピアノが弾けることは素晴らしいことである。が、本当に幼稚園や保育園の現場でむづかしい曲のピアノ演奏は必要なのだろうか？ というのは、本学(京都文教短期大学 児童教育学科)の学生を例にとると、本当に音楽する喜びや楽しみを感じている学生が少ないように感じる。言い方をかえれば、ピアノという楽器や、声という楽器の楽しみ方を十分にマスターしていないという事である。ピアノについて言えば、たたけばすぐ音が出る楽器は、子どもにとってもおとなにとっても、高級かつ、おもしろいおもちゃなのである。その高級なおもちゃと充分に向い合って遊ぶ事をしないで、やれ「音をまちがえるな」「リズムは歯切れよく、正しく」「伴奏の和音はしっかりと」という風に楽譜どおりに弾くことを善しとした教育が、昔も今も繰り返されている。そのために、A君が弾いてもB子さんが弾いても、同じが善しとされ、格一化された演奏が正しく、安心して聞ける音楽であるとする教育法が一般的である。それゆえ「ピアノは長年続けているが少しもおもしろくない」「途中から少しも上手にならない」「もっと自分の思うように弾いてみたい」という声が

聞かれる。幼児期は遊びが中心と理屈ではどの教育者も熟知していながら、どうして音楽教育にはこの遊びの部分が無いのであろうか。ピアノの中をのぞき見る、弦をさわってみる、ペダルをふみ、弾いている最中に別の子が、グランドピアノの下をくぐりぬける、上の板をたたく、等、音楽的に遊ぶことはいくらでもある。その遊びの中から「どうして?」という疑問や気持ちが生まれるのではないだろうか。どうして「音が出るんだろう」「色は黒いんだろう」「こんなかたちをしているんだろう」等。今の音楽教育の現場からは、率直などうして?という子どもの時に誰もが持つこの気持ちは生じないであろう。

幼稚園や保育園の生活発表会(音楽会)等のプログラムはきまって、うた、合奏、オペレッタ(音楽劇)等である。何ヶ月もかけて、練習に参加させられ、好きでもない楽器を奏する子どももいるだろう。(太鼓は1人、しかたなくカスタネットを奏する場合も生ずる)自由に子ども同志で楽器ならし、楽器さわりの遊びがあっても良いのでは? 音楽を遊びの中に取り入れておられる園は少なく、子どもたちは無表情で教えられた事を再現するのである。

ひどい話であるが、リズムのとれない子の小太鼓にタオルを貼ったり、まちがいの多い子のハーモニカにはガムテープを貼って演奏させ、この園は音楽に力を注いでいると、つまり音楽教育が充実していると宣伝している園もあるとか。リズムを間違えないように必死にバチを動かしている子ども、音の出ないハーモニカを、まっかな顔をしてがんばって吹いている姿を想像する時、涙が出てくる思いである。このようなことは教育の上からも決して許されることなく、音楽教育を通して、子どもが、いかに型にはめられ、人間性を失わされていくという事を、認識しなくてはいけない。又、そのよう

な音楽教育なら、やらない方が良いのでは、と思うが、実際、筆者も上記のような悩みを持ちながら、やはり、ここはドミソの和音だとか、符点のリズムが甘いとかの指導を行ってしまっている。その方が学生にわかりやすいのと、時間におわれる授業や、間違いがすぐわかる等の理由をつけては、従来のやり方をひきずっている。しかし、最近、「ピアノと遊ぼう」というタイトルであらゆる音をピアノで表現するという取り組みをはじめている。ピアノの鍵盤の上をグーやチョキ、パーの形で弾いてみる。そしてうでぐみ、ひじ、という具合に進めていく。次に救急車、ジェットコースター、チャイム、赤ちゃんの泣き声、あいさつの声と続いてゆく。そして、むつかしい事ではあるが、音符に書き表わすように指示している。もちろんその回答はすべてマル()なのである。なぜなら1人ひとり感じ方が異なり、表現方法も異なるからである。つまりそこには柔軟で弾力性に富むしなやかな答えがあって当然なのである。

音楽教育はなぜあるのか? どうしてあるべきか? はとても大きく、難かしい課題であるが、保育者養成校のピアノ指導はピアニスト養成ではない。子どもがかえるを捕えたら、すぐその鳴き声をピアノや他の楽器で表現し、「こんな声で鳴いてるんやね」とやさしく話しかけることや、「きのうジェットコースターに乗ったよ」と得意気に話す子どもに、すばやく「こんな音やった?」とすぐその音を再現し、会話を続けていける保育者、身のまわりにある物すべてに愛情を注ぎ、楽器と考えて、床をふみならず、身体のいろいろな部分をたたく、(ボディパーカッション)等、自分で考えて、音楽づくりの出来る保育者、常にしなやかな光景の中に身を置き、弾力性のある保育者を養成したい。

むつかしい曲目が弾けることも確かに必要で

あるが、生活の中にある音に耳を傾け、よく聞き、表現し、子どもと共に音や音楽を楽しむ保育者、しなやかな保育感覚を備えた保育者になってほしいものである。

3. 声のしなやかさ

毎年、1回生が入学してから約3ヶ月経った7月に、この学生達を対象に「あなたは自分の声が好きですか」というアンケートを筆者の担当科目である「声楽」の授業の中で実施している。方法は、4項目（はい、ふつう、いいえ、どちらでもない）から1項目を選択し、該当する個所に 印を記入するというものである。（表 参照）

回答結果を見て、毎年考えさせられる。それは幼児教育専攻の学生、将来はほとんどの人が幼稚園や保育園で保育者として仕事に就かれる事、又、ほとんどの人が母親になられる事、等を除いても、「好き」と答えた人の数があまりにも少なすぎる。そしてその数は毎年ほぼ同数であり、1割にも満たない。その好きでないとの答えの理由は、口答ではあるが、

- 1) 声がきれいでない
- 2) 高い声が出ない
- 3) 声が小さい
- 4) 歌がへた

等である。しかしこの1)から4)の項目については、学生の先入観や、思い込みが、影響していると考えられる。又、今迄の音楽教育の中でピアノと異なり、個人レッスンを受け、正しい声の出し方や息の吸い方（発声法や呼吸法）等を短大入学迄に学んでいる学生は皆無に近い。正しい訓練を受け、おなかから声を出す事、声を前に出す事を知らないのである。つまり歌うためには特別に訓練を受けなくても、発声器官に支障がなければ声が出る、耳から音を覚えて、歌ったり、口ずさむ事が出来るのである。が、これが曲者である。出るから大丈夫ではなく、一生涯使用していく自分の声、子どもの前で話をし、説明をし、歌い、保護者とのあいさつ、同僚との会話等、仕事をする時、生活の場で「声」は不可欠である。又、保育者はマイクを使用しないで「生」の声で勝負するのである。ポップス等の歌手達は、おそらくマイクがなければ客席のすみずみには聞こえないであろう。この二年間で現場で充分に通用する声をつくらなくてはいけない。それには常に、誰にこの声や歌を伝えたいか、姿勢はどうか、のどを使っていないか等を考えてもらいたい。実際には授業以外の場所で、話す時、電話をかける時、道を尋ねる時等、あらゆる場面で、自分の今の声はどうであったか、(相手に聞こえたか、言葉は明瞭であったか、声は芯があって健康的であ

表 . あなたは自分の声が好きですか

	2004年度入学生 (150名)		2005年度入学生 (153名)		2006年度入学生 (131名)	
はい (好き)	10 (名)	7 (%)	9 (名)	6 (%)	8 (名)	6 (%)
ふつう	63	42	53	35	64	49
いいえ (嫌い)	62	41	74	48	55	42
どちらでもない	15	10	17	11	4	3

(いずれもアンケート実施時 7月 回答率100% 対象学生 = 京都文教短期大学 幼児教育専攻1回生)

ったか、さわやかに耳に伝わったか、)を意識してもらいたい。毎日の注意深さが、声を訓練することに繋がると信じる。

筆者は、「子どもたちは教科書やプリントを持っていませんよ。あなた達の発する声や言葉、行動の一つひとつが、お手本ですよ」と、常に学生に説明している。幼児期の子どもは、保育者の声を聞き、口元をみつめ、動きを真似る。保育者が大巾で歩かれるクラスの子どもはみんな大巾で歩き、コチョココチョコと小巾で歩かれるクラスの子どもは、やはりコチョココチョコと小巾で歩くというように。毎日の保育の中で、常に歌声に注意深さを持つ保育者と、そうでない保育者とも同じ事がみられると考えられる。

たとえば、「ぞうさん」(團 伊玖磨作曲)を歌う時、子どもは大きな、そして鼻の長い象を頭の中いっぱい思い描くであろう。その時、保育者の方はどうであろうか、おそらく、歌詞や伴奏の音等に気が走っているのではないだろうか。

ぞうさん
 ぞうさん
 おはなが ながいのね
 そうよ
 かあさんも
 ながいのよ まど みちお

この詩は誰かと誰かの会話である。そして誰と誰が会話をしているのかを、保育者はキャッチしてほしい。保育者のイメージは表現力のちがいとして現われてくる。いくら良い声で音程正しく歌っていても、ただ、音(音符)にこどばをつけて歌っているところには、子どもたちは魅力を感じないであろう。会話の相手は子象と子象、子どもと子象、子象と親象、こどもとおとな、動物と象、動物と動物、象と小鳥、等、きりが無い程考えられるが、誰かと誰かを決め

ると、すぐに距離感やそれにふさわしい歌い方と雰囲気や頭の中に浮かんでくる。そして、「歌い出しの声」が始まるのである。いつも同じイメージでなく、研究して、工夫すると毎日異なった「ぞうさん」を歌うことが出来る。一方子どもたちは、本当に豊かな、味のある声を聞くことが出来る。そしてそれは子どもたちの豊かな表現力へと結びつくと考える。筆者が望む「声楽」の授業の中の声は、何もオペラ歌手のような声、アナウンサーのような端正な発音を要求したり、願っているのではない。赤ちゃんをだっこしている時、静かに、小さい声で、音程よく、のどを使わず、さわやかで温もりのある声が、保育者のぬくもりにプラスして、だっこしてもらっているという安心感や、保育者の肌から伝わる優しさの中で、心地よく眠るであろう。昔から母親達がしてきた事である。母親の聞きなれた声と肌のぬくもりと、母親のにおいが安心感を与えるのと同じである。そこには何もむづかしい理論や理屈はいらないのである。そこに、しなやかな空気が流れ、きれいでさわやかな声がある時、この事がこの上もない音楽教育を自然な形で、知らず知らずに子どもに植えている事を忘れないでほしい。正に穏やかで、しなやかなコミュニケーションがなされていると考えられる。

4. 授業の中のしなやかさ

筆者の授業について言うならば、学生と息づかいを呼応させることは、豊かなコミュニケーションを望む教師としての基礎要件であると思うが、これが又、非常にむづかしい。授業の中では、1人ひとりの個性が尊重され、1人ひとりの学びや意欲が励まされ、学びあいの関わりが生まれている教室では、学生の身体は柔らか

く、やさしく、穏やかな声で言葉が交わされている。安心出来る場所で、意味のあるコミュニケーションを行なう時、人は落ちついて、ゆっくりした声と、口調で語るものとする。のどからしぼり出すような声が行き交う教室では、とげとげしい空気がみなぎり、教室の中は心が落ちつかず、しっとりとした教育、しなやかな教育は出来ないと考える。常に学生に心地よい環境、気配りと筆者の場合は声を提供しなければならぬ。

コンビニの前で座り込む若者、電車の床にさえ座り込む姿は、今や日常的な風景である。「ムカつく」「キレル」という状態もこのことと無関係でないと思う。斎藤 孝著「こどもたちはなぜキレルか」(筑摩書房)の中で、「ムカつく」「キレル」が、一般化する状況に反比例して、「腰をすえる」「腰を入れる」「肝をきめる」「肝を据える」などの言葉は、すでに死語になりつつあると、又、斎藤によれば、『腰腹文化』の衰退が自己の心身の中の中心軸の感覚を持たずに、その場限りの感情レベルで反応する傾向に加速しており、「ムカつく」「キレル」の流行はその現われということになる。一言で言えば、呼吸が浅くなっているのである』と指摘している。又、京大の哲学者であり、詩人である篠原資明は著書「言の葉の交通論」の中で、人とのコミュニケーションには、

一方的な語り	単交通
互に通じあう	双交通
拒絶され、さえぎられる	反交通
互いにすれちがう	異交通

があると示している。今迄は双交通を理想化としてきたが、むしろ他を認め、いつも調和した響きを生み出すというよりも、たえず不協和音を伴いながら進行するのが自然である。とくに、異交通の言葉や声に耳をすますのが、重要な

いを示している。又、音楽にその事をたとえれば、オーケストレーションとしての授業をイメージし、協和音も不協和音も多様な子どもたちの考えや、イメージにひびきあわせて、シンフォニーを生み出すように、教室でも家庭でもいろいろな職場でも多様な意見やイメージをひびきあわせることは、オーケストレーションに似ている。それには個々の楽器(人間)をよく研究し、正確で適格な指示を出さなくては行けないのである。そこに自由さがあり、安心して身を任せられる人と人との関係が築かれており、肩をはって自己主張しなくとも、1人ひとりの存在が大切にされ、認められることによると、佐藤学著「授業が変わる 学校が変わる」の中に示している。つまりコミュニケーションがうまくとれていることによる「しなやかさ」である。又、佐藤は、教室という場所は1つひとつ固有の風景をもっている。どれ1つとして同じ空気を漂わせている教室はない。そこには沢山のオーケストレーションが生まれているであると述べている。

5. 仏教保育の中のしなやかさ (仏教保育の歌を通して)

保育者が日々保育するのは、良き保育者として、目の前にいる子ども一人ひとりをそれぞれよい子に育てようとする行いであり、又、それは自分自身への問いかけの日々であろうと思われる。しかし、毎日のニュースでは世界各地で起こっている民族や宗教をめぐる対立抗争は激しく、それは政治や経済の問題と深く関わりを持ち、世界中の多くの人が考える大きな問題になっている。わが国では最近又、「いじめ」「虐待」の言葉が新聞に載らない日はないくらいである。実習等でお世話になっている某施設では、

両親との死別や離婚のため、やむなく入所する者に加えて、虐待や、親を含む他の男性からの性的虐待のための入所者も増えているとの話を聞き、ゾッとすると同時に入所に至らないが、悩み・苦しみを抱えている人が沢山おられると思われる事を考えると、何と云ってよいか言葉が見つからないのが率直な気持ちである。

仏教では、人間だけでなく、草木にも虫鳥、獣にも、水や石や大地にも、つまり世の中のすべて存在するものに仏性があると考えられている。これは童話の世界にも通ずるものであり、すべての生物、木や雲、太陽等が人間と同じように呼吸をし、生活し、話す事が出来、考え、行動することに一致している。そして、これは素晴らしい平等感であり、いのちの尊さ、道具等を大切に教育に結びつき、教育の上からも大きなポイントとも考えられる。

先日、ある仏教系の幼稚園を訪問した時のことである。玄関の壁面に、

わたしたちは、ほとけさまをおがみます
おはなしをよくききます

みんなとなかよくいたします
という言葉が貼ってあった。私は一瞬、ハッとして動けなくなった。筆者は仏教系の幼稚園ではないが、二年間通った。きっと何らかの言葉が目につくところに貼ってあったと思われるが何が貼ってあったか、何も思い出せない。そしてこの言葉を視て、又、胸が痛くなった。長年仏教系の短期大学に勤めているながら、手をあわせて拝まなくとも、心の中で感謝し、心の中で手を合わせた日が、一体どれだけあったろうか、又、「はなしをききます」という言葉にも、学生達には、「話を聞いて下さい」「聞いて！」と云っておきながら、自分はどうかあったろうか、次の「なかよくいたします」に至っては、まったく耳の痛い事であり、反省材料ばかりが

浮かんでくる有様である。

今、公教育で求められているのは、開放的でいろいろな解釈や理解が可能な世界観や人生哲学の探求を含んだ教育的な宗教教育ではないか。これまで人類が長い時間をかけて作り上げてきたさまざまな宗教的伝統や、考え方を学ぶことを通して、自分自身で人生の意義や生き方、価値観を研究し、どのような場面にも、自律的な意志決定ができるようになることを支援する教育が言われているが、正しく幼児期にこのような内容を含みながらの仏教保育は1つの方法であり、その中で歌を歌うことは、優しく生き方や、あり様を教える方法だと考える。そして子どもたちに仏教保育の根元として、宗派をこえて示しているのが、「明るく・正しく・仲よく」という三宝をうやまうことになるのだと理解する。又、その考え方は「八正道」にみる事が出来る。つまり、「正しくみる、正しい答え、正しい言葉、正しいおこない、正しい生活、正しい努力、正しい気づかい、正しい精神統一」なのであろう。

宗教心の教育という観点からみると、宗教心を健全に育てることにより、子どもたちが健全に育ちうる可能性を見つけようとしている。又、宗教学習を通して、宗教文化をも1つのセットとして考えようとしている。その上に、宗教的情操を含む教育が仏教保育だと考える。最近影をひそめた「日曜学校」に筆者の母は通っていた。その風景の中で、思い出せるのは偉人伝を聞いたこと（乃木將軍等）と、異年齢の子どもたちといっしょに歌った「日曜学校のうた」等であり、その当時をなつかしく思い出しながら歌っていた姿を思い出す。

大げさに言えば、声は昔からさまざまな儀礼の中に不可欠に溶けこみ、その儀礼を時間的に押しすすめる役目を演じていた。つまり人間は、

いつの世にも、そしてどこでも、声を祈りの表現手段としてとらえ、ある場合には無意識的にコミュニケーションの一つとしてとらえ、又ある場合は、有意識的に教育の一つとしてとらえており、それは各々の場面に於いて、理想的な手段として、声や歌う行為を扱ってきたと思われる。現在、我々の生活の中では、声は使用しなくても生活出来る。用が足りるのである。ネット等で買物、スーパー等では、ガゴに品物を入れ、レジを通過する。それで買物は終了である。一言も発しなくてもよいのである。とりわけ自分の声がどうか、相手にさわやかではっきりしているとかを、考える事すら問題外などである。しかし声を媒体とする仕事に就こうと考える人にとっては、不可欠な要素である。関東の国立M大学では、授業の必須科目に「話し方」が導入されていると、テレビの番組で知った。就職対策の一つにも考えられているが、大学では、「生きる力」「生きぬく力」の一つとして、この科目が位置づけられているとの説明が、とても印象的であった。

仏教教育を基盤にした短期大学の幼児教育専攻に籍を置く筆者から見て、幼稚園や保育園での毎日の中で音楽は不可欠なものであると考える。そこには幼児の声や歌声があり、そして仏教保育がなされているところには、佛さまに関する歌、感謝したり、友だちと仲よくする内容の歌があり、行事や季節の折々で、音楽を通して仏教を子どもたちに、わかり易く、直線コースで結び伝えていく事のなかから、優しく、温かい思いやりの心、励む気持ちや精神が生まれ、育っていくものの一つとしているような曲目が使用されている。

しなやかな教育に必要とされる資質は、仏教保育の中で使用される曲を通して、そのようなしなやかさを培うことも出来る。それは穏やか

で、無理のないメロディーに加えて、優しさや思いやりを示す詞、感謝や慈くしみの心を現わす詞の中に、見ることが出来る。又、逆から言えば、しっとりとした空気と、しなやかで、穏やかな息づかいと、声が満ちていれば、その保育は素晴らしいものであると思う。

筆者は、現在どのような仏教保育の曲が幼稚園や保育園で使用されているかを知るために、次のようなアンケートを実施し、結果を表2に示した。

現在使用されている仏教保育の曲

実施期間 2006年6月1日～6月30日

対 象 京都市内 幼稚園 17園

(いずれも仏教系) 保育園 17園

回 収 率 幼稚園 12園 (71%)

保育園 9園 (53%)

方 法 郵送

93曲を提示し、その中から日常的に歌われているもの、時々歌われているものを選んでもらう。

提示曲の内容 ①こどもの讃仏歌・季節のうた 生活の歌に分類

②作詞者、作曲者、歌い出しの詞を提示

アンケートの番号1から10は日常の讃仏歌であり、1と2は黙想の曲である。旋律がとてもきれいで、八小節の短い曲であり、黙想時や礼拝時の入・退場の曲としても多くの園で使用されている。3から10までの曲は、日常の礼拝時に使用されている曲である。(ののさま=幼児語で礼拝することをなむなむする・のんのんするとも言っていることによるのであろう)番号11から18は四季のうたであり、お釈迦様の誕生を祝う花まつりの歌は人気が高く、多くの園で使用されている。悟りを得られた成道会のうた

表 2 . 現在よく使用されている仏教保育のうた

(印 : 日常的に歌われている 印 : 時々歌われている 数字は園数を示す)

	曲目	作詩者	作曲者	うたいだし	幼稚園	保育園	合 計
1 .	子どもの讃仏歌 黙想の曲		本多 鉄磨	歌詞なし	7	4	11
2 .	黙想の曲		本多 鉄磨	歌詞なし	9	4 1	13 1
3 .	のんののののさま	三橋あきら	本多 鉄磨	おめめをつむりてをあわせ	6	5 2	11 2
4 .	ねね	三橋あきら	本多 鉄磨	のんののののさまこどもが	5 3	3 2	8 5
5 .	ののさまに	塚本 章子	賀来 琢磨	ののさまにあげましょきれ	4	4 2	8 2
6 .	ほとけさま	三橋あきら	本多 鉄磨	やさしいやさしいほとけさ	6	2 1	8 1
7 .	ののさま	水谷 式夫	水谷 式夫	のんののののさまほとけさ	3	3 2	6 2
8 .	仏さま	山田 静	小松 耕輔	のんののののさまほとけさま	2 1	4	6 1
9 .	している	立野 勇	本多 鉄磨	ののさまはくちではなんに	1 1	5	6 1
10 .	おちかい	高橋 良和	松涛 基	おおきなおこえてほとけさ	3	2	5
11 .	四季のうた (春) こどもの花まつり	賀来 琢磨	本多 鉄磨	おはなあげましょささげま	10 1	6 3	16 4
12 .	おてらのぼっぼ	立野 勇	玉山 英光	おてらのぼっぼはとぼっぼ	1	1 2	2 2
13 .	きくのはな (秋)	立野 勇	本多 鉄磨	ひとつふたつみつつよつ	3 2	5 3	8 5
14 .	あかいことりが	三橋あきら	平井康三郎	あかいことりがおじぞうさ	1 2	1 1	2 3
15 .	いつまでも (冬)	三橋あきら	本多 鉄磨	おめめをつむるとののさま	8 1	3	11 1
16 .	成道会のうた	三橋あきら	本多 鉄磨	ひがしのそらにおほしさま	6 2	3 4	9 6
17 .	涅槃会	長田 恒雄	下総 皖一	みんな みんなないてます	6 1	2 3	8 4
18 .	やさしいこえ	三橋あきら	本多 鉄磨	やまをでられたおしゃかさ	5	3 1	8 1
19 .	生活のうた せんせいおはよう	三橋あきら	本多 鉄磨	せんせいおはようみなさん	10	7 1	17 1
20 .	さようならほとけさま	三橋あきら	本多 鉄磨	きょうもたのしくすぐまし	6	4	10
21 .	おべんとうのうた	三橋あきら	本多 鉄磨	たのしいおひるになりまし	5	3	8
22 .	たんじょうび	三橋あきら	本多 鉄磨	たんじょうびたんじょうび	5	1 1	6 1

や亡くなられた時の涅槃会の歌なども行事の中でよく歌われている曲である。19から22は日常生活の中で歌われている歌で、それぞれの曲もよく歌われている。

むつかしい音程の曲や、時代と共に使われなくなった曲や、歌詞のむつかしい曲は、最近では歌われなくなり、テレビ等の影響で、リズムに

ノれない曲等は、子どもたちは好まなくなり、歌いたがらなくなってきたと嘆いておいでの先生のご意見もあった。仏教系の短大の中でも、即戦力をつけることや、実習準備の中で、仏教保育の曲を「声楽」の授業の中では、1、2曲しか取扱っていないのが現状である。がこのアンケートを通して、協力いただいた園からは、

「改めて考える機会をもった」「こんなに多くの曲目がある事をはじめて知った」との温かい声をいただき、喜こんでいる。再度、角度を変えての整理を考えている。

ま と め

健康であるとは、ただ単に心や体が「病気でない」状態のみでなく、自分のやりたいことを自らが見つけ出す心の広がりや強さ、そしてそれを実行出来る勇気や身体的強さが備わっている状態のことであると考え。しかし現在の子どもたちの姿は、それにはほど遠いというのが現実ではないだろうか。現在の学生も含めて、自分からは何も出来ず、遊びも長続きしない、(90分の授業の途中で集中力が切れる等)マナーの欠如や、主体性や自主性に欠け、責任感や計画性に欠けるという事もよく言われている事であり、実感する。まさしくこれは「しなやかでない」生活を投影していると考え。保育の場でも、保育者が一人ひとりの子どもに、又、全員の子どもたちに無伴奏で歌を届けている場面を本当に最近、見なくなった。そして気持ち良さそうに歌を歌っている子どもたちを、見かけることもめっきり少なくなったと感じる。

あなたのために誰かが歌いかけてくれる。それによって心地良い快感が生まれ、その快感を受け止め、共有してくれる仲間や大人によって歌う喜びや楽しさが育まれていくものと考え。ひとつの歌を一緒に歌う。大人と声を合わせる。又、園庭で遊びながら「あ・る・こうあ・る・こう～」と歌う時、砂場でケーキをつくり、仲間と「ハッピーバースデー」を歌う時、大人や仲間とにコミュニケーションが生まれ、心を豊かに育てることに繋がる。祖父母が知っている、両親や姉や兄が歌った歌の中に、我々

が今、子どもとともに歌いたいと思う歌や伝えたいと心から思う歌があれば、それは大切な文化である。

保育者に必要なしなやかさを、京都文教短期大学教授の照屋敏勝は次のように示している。

体のしなやかさ

感性や感受性のしなやかさと豊かさ

思考や発想のしなやかさと想像性の豊かさ

表現のしなやかさと多様性

これはまさしく保育者の資質や、生き方、考え方も一致している。そして保育者が仕事から離れた時、自分の保育の中をふりかえり、考え方や、幼児の未来像を思い描く時、趣味に興ずる時も「しなやかさ」を持ち続けてほしいものである。

引用・参考文献

- 貝塚 茂樹 戦後教育のなかの道徳・宗教 文化書房 博文社 2003
- 加藤 西郷 宗教と教育、法蔵館 1999
- 京都新聞・朝刊 2005年9月10日(土) お受験商戦 京で熱く
- 小泉 文夫 音楽の根源にあるもの 青土社 1977
- 小泉 文夫 子どもの遊びとうた 草思社 1986
- 斉藤 孝 子どもはなぜキレるのか 筑摩書房 1999
- 佐藤 学 授業を変える 学校が変わる 小学館 2000
- 田中 享胤 中島紀子編著 幼児期の尊さと教育 ミネルヴァ書房 2001
- 西川小百合・松丸春生 声で読もう声で描こう 三省堂 2003
- 日本仏教保育協会 わかりやすい仏教保育 チャイルド本社 2004
- 日本仏教保育協会 仏教保育聖歌集 すずき出版 1999
- 南 曜子・今村方子・今川恭子 心を育くむ子どもの歌 教育芸術社 2005
- 照屋敏勝 啐啄 第2号(照屋敏勝保育情報誌)